

『源氏物語』 宇治十帖の音

—— 浮舟にまつわる聴覚表現から ——

清 水 美 優

はじめに

『源氏物語』 宇治十帖は物語の続編にあたり、正編の主人公である光源氏の子孫が中心人物となる。本稿では『源氏物語』最後のヒロインである浮舟の感覚、特に聴覚に焦点を当てたい。浮舟が実際に視覚、聴覚、嗅覚を使つて感じ取った風景、音、声、香り等の用例数を調べてみると、視覚十例、聴覚十五例、嗅覚五例の用例が見つかった。浮舟自身が感じ取っている感覚は聴覚の用例数が多いのである。

『源氏物語』には全体を通して多くの音が描かれている。

楽器の演奏に始まり、鳥のさえずりや虫の声、川の流れる音

に、風が吹き抜ける音や人の声がある。宇治十帖では宇治が中心的な舞台となるため、自然によって発せられる音が多い。特に川の描写が多く、先行研究では用例数の多い風の音、水の音の変化が浮舟自身の心情の変化に対応していると論じられている¹⁾。

しかし、宇治十帖には他にも、これまであまり論じられていない音が多くある。その中でも、寺の鐘の音、夜明けを告げる鶏の声、浮舟の故郷である東国に関する音を取り上げ、それらの音が浮舟にとってどのような意味であるのか、場面状況や心情をふまえながら考察していきたい。

一、鐘の音

まず、寺の鐘の音に焦点を当てたい。鐘の音は正編に三例（未摘花巻、明石巻、夕霧巻）、宇治十帖に七例（橋姫巻、椎本巻、総角巻、宿木巻、浮舟巻）ある。宇治十帖に鐘の音の用例が集中しており、宇治十帖での鐘の音は何らかの重要な役割を担っているのではないだろうか。宇治十帖での鐘の音の用例を考察し、そこから浮舟にとっての鐘の音の意味を考えたい。その中で重要となるのは、浮舟が聞く鐘の音は他の用例に登場する時を告げる鐘とは違い、誦経時の証である。時を告げる音とは違い、誦経時に鳴らされる音には浮舟にとつてどのような意味が込められ、どのような役割を担っているのだろうか。

まず宇治十帖における鐘の音の先行研究を確認したい。宇治十帖の鐘は夕暮れの鐘ではなく、夜明けを告げる鐘として描かれていることが多い。よって、鐘の音に注目した数少ない論文の中で注目されているのは、鐘が鳴らされる時間帯であり、当時の鐘の音と言えば夕暮れに響く鐘の音が主流であつ

たとされている²⁾。

また、夕暮れの鐘ではなく、夜明けの鐘が宇治十帖に多く書かれたのかについては、三田村雅子氏が次のように論じている。³⁾

宇治十帖の鐘の音が物語の時間である 夜 を、日常の世俗の時間である 昼 から区切りとるように置かれていることは疑いないことであるが、単に夜と昼を区切るだけであるなら、人相の鐘の声であつてもかまわないものを、それを避けて、夜明けの鐘の音を選ぶのは、物語が問題にしようとしていることを、一般的な無常観に解消していくのを避ける用意でもあつただろう。

夜の深まりとともに、水の音・風の音に触発されるように引き出されてくる様々な興奮と欲動と惑いは、夜明けを告げる鐘の音によって中断されることで、一層その昏迷を印象づけられることになる。一夜登場人物のだからを眠らせなかつた問題は、何一つ解決したわけでもないのに、つきつめた思いが夜明けとともに棚上げされ、日常の世界へと麻痺していく。その直前の束の間の疚しさを喚起するように鐘の音は響く。

(一四〇頁)

では、この音が登場人物達の心情にどのような影響をもたらし、音自体がどのような役割をもっているのだろうか。浮舟の考察に入るまえに、それ以外の登場人物の用例を検討したい。

は俗聖として宇治に住む八の宮に強い関心を持つ薫が、八の宮に会うため宇治を訪れた場面である。ここでは薫が宮の娘である大君と中君の二人の姫君を垣間見し、その後邸に仕える弁の君から自分の出生の秘密を聞き、残りの話も聞くために再会を約束する。そして立ち去ろうとした時に夜明けの鐘の音を聞く場面である。

立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の声、かすかに聞こえて、霧いと深く立ちわたれり。(橋姫巻 一一六頁)

この寺の鐘の音は、本文の「かのおはします寺の鐘の声」から八の宮のいる寺の鐘の音がかすかに響いていることになる。ここで検討する鐘の音は明確に示していない例もあるが、全てこの寺の鐘の音であると推測される。寺の鐘の音が鳴り、霧が深く立ちわたるこの場面は「深い霧の中にくぐもる」とく聞こえてくる鐘の音が、薫の心の象徴。わずかに分かってきた疑惑がそのまま封じ込められる。」⁴という指摘がある。

次にあげる の場面は山寺に籠る八の宮が病気になり、姫君たちが八の宮の病状を心配していた頃、夜が明けて部をあげると鐘の音が響く。同時に八の宮の訃報が届く場面である。

八月二十日の程なりけり。大方の空のけしきもいとゞしき頃、君達は、朝夕霧の晴るゝ間もなく、思し嘆きつゝながめ給ふ。有明の月のいとほなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの部あげさせて、見いだし給へるに、鐘の声かすかに響きて、明けぬなり、と聞こゆる程に、人々来て、「この夜中ばかりになむ、うせ給ひぬる」と泣く／＼申す。(椎本巻 一四六頁)

この鐘は と同じく夜明けの鐘と分かる。夜明けと共に八の宮の訃報が届くことから、八の宮が亡くなったことを象徴するかのような鐘ともなっている。

の場面は薫が想い人である大君と対面した際に部屋に押し入り、何事もないまま夜が明けて鐘の音を聞く場面である。明るくなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近くきこゆ。

よ深きあしたの鐘の音かすかにひゞく。「今だに。いと見ぐるしきを」と、いとわりなく恥づかしげにおぼしたり。「ことあり顔に朝露もえ分け侍るまじ。また、人は

いかゞおしはかり聞こゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、たゞ世にたがひたる事にて、今よりのちもたゞかやうにしなさせ給ひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心の程も、あはれと思し知らぬこそかひなけれ」とて、いで給はむのけしきもなし。

(総角卷 一八一頁)

この鐘の音について、三田村氏は次のように解釈している。⁽⁵⁾
八の宮という庇護者を失つた姫君達を世俗の荒波が襲うように、波の音は響き、薫の侵入をくいとめきれない無力さをかみしめる涙と合流するように思われるのである。大君にとつては、惑いどころではない痛切な悲しみであり、その後には続く鐘の音は薫の場合とは違つて恐怖の夜が過ぎ去つたことの安堵の思いとして受け止められる。

(一三三頁)

鐘の音は無事に夜が明けたことを告げ、大君に安堵を与える音となつていふと考えられる。また、この場面は鐘の音が男女の別れを促す役割を果たす異例なものとなつていふ。

次の「は、薫が匂宮を中君の元へ手引きした後、大君を口説くも再び拒絶され、夜明けの鐘の音を聞く場面である。」

いとゞしき水の音に目もさめて、よはのあらしに山鳥のこゝちして、あかしかね給ふ。

例の、明け行くけはひに、鐘の声など聞こゆ。いぎたなくて出で給ふべきけしきもなきよ、と、心やましく、こわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。

(総角卷 二〇三頁)

この鐘は、の鐘と同じ、夜明けを告げる鐘であるが、「例の」との場面が意識されている。鐘の音を描くことで、再び薫と大君が結ばれなかつたことを強調する役割を果たしているのではないだろうか。大君にとつて鐘の音とは、薫に迫られる苦痛の夜から解放される重要な音であり、一方、大君にとつては大君のもとから出ていかなければならないことを告げる合図となる。薫には鳴つてほしくない、大君と別れさせられる憂鬱な音であつたと考えられる。

は、大君が亡くなり、宇治に籠る薫が月を見上げながら向かいの寺の鐘の音を聞く場面である。

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめくらしして、世の人のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の、くもりなくさし出でたるを、すだれ巻き上げて見給へば、むか

ひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、けふも暮れぬ、と、
かすかなるを聞きて、

「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべき
この世ならねば」

風のいとほげしければ、節おろさせ給ふに、よもの山の
鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限
りなくと磨くも、えかうはあらぬはや、と覚ゆ。わづか
に生きいでてもなし給はましかば、もろともに聞こえま
し、と思ひつゞくるぞ、胸よりあまるこゝちする。

(総角巻 二五〇頁)

この場面の鐘は、「向かひの寺」と音のする場所が明確に示
されており、これまでの夜明けの鐘とは異なり、日暮れを告
げる鐘である。この場で日暮れの鐘を登場させることは、
無常觀を表し薫の孤独を表現していると考えられる。

は大君の没後、匂宮に京へ迎えられた中君が八の宮の三
回忌に宇治の寺の鐘の音を聞きたいと薫に頼む場面である。

「世の憂きよりは、など、人は言ひしをも、さやうに思
ひくらぶる心もことになくて、年ころは過ぐし侍りしを、
今なむ、なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく

思つ給ふるを、さすがに心にもかなはざめれば、弁の尼
こそつちやましく侍れ。この二十日あまりの程は、かの
近き寺の鐘の聲も聞きわたさまほしくおぼえ侍るを、し
のびて渡させ給ひてむや、と聞こえさせばや、となむ思
ひ侍りつる」と宣へば、

(宿木巻 五五頁)

中君は「かの近き寺の鐘の聲も聞きわたさまほしく」とある
ように、八の宮が亡くなる時にいた山寺の鐘の音が聞きたい
と薫に伝える。中君と鐘の音が関わる場面は、八の宮の訃報
が届いた の場面である。鐘の音は中君にとって、父親の死
と結びついている音であり、執着される音として描かれてい
る。

以上が浮舟を除く鐘の音の用例である。鐘の音が時刻を告
げている点では同じだが、登場人物達によって音の受け取り
方や、音の役割が全く異なっていることが分かる。では浮舟
の場合、鐘の音はどう捉えられているのか、ここから浮舟が
聞いた鐘の音について取り上げたい。

は浮舟が入水の覚悟を決めた頃、事情を知らない母親か
ら文が届く場面である。内容は母親が見た夢が不吉なもので
あったため、物思いに沈んでいる浮舟の身を不安に思い、近

くの寺に誦経をさせるように言い聞かせるもので、浮舟は母親が依頼した誦経の鉦の音を聞きながら母親宛ての和歌を詠む。

京より母の御文もて来たり。「寝ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見え給ひつれば、誦経所々せさせせなどし侍るを、やがて、その夢ののち、寝られざりつるけにや、たゞ今昼寝して侍る夢に、人の忌むといふことなむ見え給ひつれば、おどるきながら奉る。よくつゝしませ給へ。人離れたる御住まひにて、時々立ち寄せ給ふ人の御ゆかりもいとおそろしく、なやましげにものせさせ給ふ折しも、夢のかゝるを、よろづになむ思ふ給ふる。参り来まほしきを、少将の方の、なほいと心もとなげに、物怪だちて悩み侍れば、片時も立ち去ること、と、いみじく言はれ侍りてなむ。その近き寺にも御誦経せさせ給へ」とて、その料の物、ふみなど書き添へて持て来たり。かぎりと思ふ命の程を知らで、かく言ひ続け給へるも、いと悲しと思ふ。

寺へ人やりたるほど、かへりごと書く。言はまほしきこと多かれど、つゝましくて、たゞ、

「のちにまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に
心まどはで」

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくぐと聞き
臥し給ふ。

「鐘のおとの絶ゆるひゞきにねをそへてわが世つき
ぬと君に伝へよ」

くわんず持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」
と言へば、ものの枝に結びつけて置きつ。

(浮舟巻 八一頁)

これまでの先行研究では、その多くが浮舟が聞く鐘を寺院の釣り鐘として解釈してきた⁷⁾。しかし、から分かる通り、浮舟が聞いた鐘の音は時を告げるものでなく、誦経時に鳴っている。このことから誦経時に鳴らす鉦の音として考える方が適切ではないだろうか。浮舟が聞く鉦の音は、先述したくの鐘と比較すると、鳴らされる用途も違えば種類も異なっている。本稿では、浮舟が聞く誦経時の鉦の音を、時を告げる鐘とは全く別の音として捉え、その音は浮舟にとって何を示しているのかについて考えていきたい。

改めて、の本文を見てみたい。母への返事を書いている

と「誦經の鐘」が風に乗って浮舟に聞こえてくる。そして浮舟はその音色を「つくく」と聞いています。鐘の音を釣り鐘として理解しているものではあるが、この場面について阿部好臣氏は、前掲の場面と重ねて読むことで次のように解釈している。⁸⁾

この鐘の音に、父八の宮の死を告げたあの響きを重ねて読める物語の仕組みを見つめてみたい。この後、浮舟は失踪してしまい、後でこれが「物の怪法師」の所為だと叙されるのだが、私は、この鐘の音が父八の宮からのメッセージとしてあり、浮舟を救いに来たことを示唆しているのだと読んでいる。ともあれ、「鐘の音」は、憂愁に囚われた者達の耳に響く、仏ならぬ人の想いの象徴だったのだろう。

鐘の音を八の宮からの救いのメッセージとして捉えているが、むしろこの鐘の音は浮舟をあの手へ送り出す鐘の音として考えられないだろうか。新編日本古典文学全集「源氏物語」頭注では以下のように解釈している。⁹⁾

男女の愛欲に傷つき、死の淵に立つ浮舟であるが、その耳に届く鐘の音は、娘の息災を祈る母の心を伝えながら、

同時に彼女を死への門出に誘うもの。

この指摘の通り、母親の娘のための祈りによる音でありながら、同時に彼女を死へと近づけていく音となっているのではないだろうか。

鐘の音を聞いている浮舟の心情はどうであろうか。浮舟は鐘の音を「つくく」と聞いています。¹⁰⁾「源氏物語」全体で、この言葉は二十八例あり、この言葉が使われる時は登場人物が外面的には物静かだが、心中では深い悩みを抱え、物思いに沈んでいる状態が多い。浮舟もまた入水の覚悟をしつつ、何も知らない母親が自分の身を心配する文を読み、悲しく思う。それは彼女にとつて深い悩みとなるが、外面的にはもの静かに聞き臥すだけなので誰も浮舟の悩みに気づかない。

近くにいる乳母も右近もこの場面では浮舟の苦悩には気づいておらず、右近は蜻蛉巻にて浮舟が自分に悩みを打ち明けてくれなかったことを嘆き、浮舟の入水を思いもしなかったと述べている。この場面では、誰にも気づかれなかった浮舟の深い悩み、悲しみを読み取ることができる。

次に浮舟の詠んだ和歌をより詳しく考察する。浮舟の和歌を再掲し、それに対する各注釈書の訳を示した。

鐘のおとの絶ゆるひゞきにねをそへてわが世つきぬと君
に伝へよ

【玉上評釈】鐘の音の絶えてゆく響に、泣く声をそえて、私の命も終わったと、母に伝えて下さい。

【集成】あの誦経の鐘の音が消えてゆく響きに、私の泣く音を添えて、私が死んでいったと母に告げてほしい。

【新大系】山寺の鐘の音が消えてゆく余韻に私の泣く声を添えて、私の命は終わりましたと母君に伝えて下さい。

【新全集】鐘の音の消えてゆくこととする響きに泣く音を添えて、この私の命も尽きたのだと、母君に伝えておくれ。

鉦について、集成だけが「誦経時の鐘」とするが、他の注釈書では「鐘」としか書かれておらず、釣り鐘の方をイメージしていると考えられる。しかし、ここは先述の通り鉦の音として理解しなければならないだろう。

この歌は、浮舟の泣く声を鉦の音と一緒に母親へ自分の命が尽きることを伝えてほしいという意味が込められている。そして、「ね」とは浮舟の泣く声と解釈されている。この和歌には絶えていく鉦の音に自分の泣き声をそえてと詠まれており、この「そへて」という言葉には「なぞらえる」という

意味がある⁽¹⁾。この歌は鉦の音が徐々に絶えていくことになぞらえて、自分の泣き声自身も絶えていくことを表しているのではないだろうか。

ではなぜ泣き声を「そへる」のか。下の句には「君につたえよ」とあり「君」とは母親を指している。これは自分の泣く声を母親に聞いて欲しかったからではないかと考える。浮舟は「誦経の鐘の風につけて聞こえるを」と鉦の音が風に乘って、離れているこちらまで届いてくるのを聞いて、「つくぐ」と聞き臥し給ふ」という状態になっている。鉦の音は風に乗って音を届かせることができる音であると思い、誰にも気づかれない深い悩みによる泣き声を母親に鉦の声とともに伝えたいと考えたのではないか。それが「君に伝えよ」の部分に当たると考えられる。

鉦の音は浮舟を死へと誘うものとして描かれ、その音は深い悲しみや悩みを抱えている彼女に入水を実行する覚悟を持たせる音となる。そして、「鐘のおとの…」の和歌に詠まれた鉦の音は徐々に途絶えていく浮舟の生を表現し、更には浮舟が死んだ後に、葬儀の誦経で鳴らされる鉦の音としても捉えることができる。浮舟にとって鉦の音は自分の死を表現す

るだけでなく、自分を葬送する時に鳴らされる音としても聞こえたのではないだろうか。

で描かれた鉦の音に注目したのは、この誦経時に鳴らされる音は浮舟にとって生死に関わる音であつたと考えるからである。浮舟以外の登場人物が鐘の音を聞いて安堵を得たり、過去に執着したりする例以上に、宇治十帖最後に書かれた鉦の音は浮舟の命に関わる重要な音であつた。そのため、同じ「かね」と表現されてもこの場面の音は他の用例とは異なる重要な音であると考えられる。

一、二、鶏の声

次に浮舟の聞いた鳥の声に注目する。宇治十帖全体での鳥の用例は「とり」と表記されている例が十例（和歌に組み込まれているもの、羽ばたく音も含む）、登場人物達が実際に聞いている鳥の声が三例、浮舟が聞いた鳥の声は一例だけであつた。では、一例だけ見られた浮舟が鳥の声を聞いた場面はどのようなものだったのか。またその鳥はどのような役割を担っているのだろうか。

は入水未遂をした浮舟が横川の僧都に助けられ、小野の里に身を隠している手習巻である。小野の尼君不在の折、浮舟に求愛している中将が訪ねてくる。困つた浮舟が老尼君の眠る部屋で夜を明かす場面である。

からうじて、とりの鳴くを聞きて、いとうれし。母の御声を聞きたらむは、ましていかならむ、と思ひあかして、こゝちもいとあし。供にて渡るべき人もとみに来ねば、なほ臥し給へるに、駟の人は、いとく起きて、粥などむつかしき事どもをもてはやして、「お前にとくきこしめせ」など、寄り来て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬこゝちして、「なやましくなむ」と、ことなしび給ふを、しひて言ふもいとこちなし。

（手習巻 一七五頁）

浮舟が聞いている鳥の声は夜明けに書かれていることで鶏の声と推測できる。鶏の声といえば一般的には恋人達が朝に別れる場面で描かれることが多い。宇治の邸にいた時、薫と勾宮それぞれが浮舟に逢い、夜を明かす場面はいくつか描かれている。しかし、鶏の声は一切書かれておらず、浮舟が鶏の声を聞くのはこの一例のみである。ではこの鶏の声は一体

何の役割を果たしているのか。上野氏は男性の急な訪問による恐怖からの解放として捉え、「闇の終焉を告げる鶏の聲に安堵の種を見出した点では一致していた。それが恐怖と憂慮とで窒息寸前であつた状態からの、当面の解放ないしは救済を意味していた」と論じている。⁽¹²⁾ 筆者も鶏の聲は浮舟にとつて解放、救済を意味していると考ええる。

宇治十帖には同じく男性に迫られて恐れながら夜を迎える場面がある。それは大君と薫が何事もなく朝を迎える場面である。前掲本文とそれに続く場面をとして引用する。

明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近くきこゆ。

よ深きあしたの鐘の音かすかにひびく。「今だに。いと見ぐるしきを」と、いとわりなく恥づかしげにおぼしたり。「ことあり顔に朝露もえ分け侍るまじ。また、人はいかゞおしはかり聞こゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、たゞ世にたがひたる事にて、今よりのちもたゞかやうにしなさせ給ひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心の程も、あはれと思し知らぬこそかひなけれ」とて、いで給はむのけしきもなし。「あさましく、かたはならむ」とて、「今

よりのちは、さればこそ、もてなし給はむまゝにあらむ。けきは、また聞こゆるに従ひ給へかし」とて、いとすべなしと思したれば、「あな苦しや。あかつきの別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。にはとりも、いつかたにかあらむ、ほのかにおとなふに、京思ひ出でらる。

「山里のあはれ知らるゝ声々にとりあつめたるあさほらけかな」

女君、

「鳥のねも聞こえぬ山と思ひしを世の憂きことはた

づね来にけり」

障子口まで送り奉り給ひて、よべ入りし戸口より出でて、臥し給へれど、まどろまれず。なごり恋しくて、いとかく思はましかば、月ごろも今まで心のどかならまじや、など、帰らむことももの憂く覚え給ふ。

(総角巻 一八一頁)

この場面は、大君にとつて薫と過ごすこととなつた辛い夜であつた。何事もなかつたとはいへ、鐘の音は薫から迫られた夜からの解放を意味する音であり、大君にとつて、とても

待ち遠しい音であったと考えられる。この鐘の音について三田村氏は次のように述べている。¹⁵⁾

更に追いうちをかけるように「夜深き朝の鐘の音」が響く。大君にとって恐怖の一夜の終わりを告げる救いの鐘でもあるが、同時に男とついに一夜を明かしてしまつたという後悔を呼び起こす鐘が、亡き父宮を想起させながら響く。その大君の想いから遠い所で、薫は、夜明けを告げる鶏の聲に、京を思い出し、疑似後朝の気分を染しむかのような歌を詠む。(一四三頁)

大君にとつて、男性から逃れられる安堵をもちたらず鐘の音に対し、薫は鶏の声を聞きそれを和歌に詠む。この後朝の雰囲気、鶏の声を浮舟は全く異なるシチュエーションで聞いているのである。加えて、鐘の音は八の宮を想起させる音であり、¹⁶⁾一で確認した本文のように八の宮の死と繋がる音でもある。一方、鶏の声については、吉海氏に次のような指摘がある。¹⁵⁾

ここでは「暁の別れ」と表現することで、いかにも男女の後朝であるかのような演出がなされていた(『事あり顔』ともあった)。たとえ実体を伴わない疑似後朝であるにせよ、男が女のもとを去るにふさわしい暁の時間帯

が、「鶏鳴」という聴覚的というか原始的な表現で設定(演出)されていることに間違いはあるまい。(一〇三頁)

鐘の音は大君にとつて男性に迫られた夜の解放を意味しつつ、その後に聞こえる鶏の聲は薫と大君の疑似的な後朝にする役割を果たしている。そして、鐘の音は大君の父親である八の宮が亡くなる際に聞こえてきた音とつながり、父親が残した遺言に背いて男性と一夜を明かしてしまつた大君にとつては、鶏の声よりも父親に関わる鐘の音の方がより耳に入ってきたのではないか。大君にとつて鐘の音は、男性からの解放の音であり父親を思い出させる音であつたと考えられる。

では大君の例をふまえ、浮舟の聞いた鶏の声について考えたい。諸注釈書でも、この鶏の声を魔物が支配する夜からの解放や夜明けを待ち焦がれたことが指摘されている。また、続く「母の御声を聞きたらむは」との関わりが重要視されている。¹⁶⁾

ではこの場面で、鶏の聲が聞こえ夜が明けることを「いとうれし」と感じた浮舟は何を恐れていたのだろうか。諸注釈書の示す魔物とは何なのか。それは、浮舟が過ごした部屋で眠っている老尼君達である。次の「は夜が明けるまでの浮舟

と老尼君達の様子を書いたものである。

姫君は、いとむつかしとのみ聞く老い人のあたりにうつぶし臥して、いも寝られず。宵まどひは、えもいはずおどろくしき躰しつゝ、前にもうちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびき合はせたり。いと恐ろしう、今宵、この人々にや食はれなむ、と思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一つ橋あやぶがりて帰り来たりけむ者のやうに、わびしく覚ゆ。こもき供に率ておはしつれど、色めきて、この珍しき男の、艶だちぬ給へる方に帰りいにけり。今や来る今や来ると待ちぬ給へれど、いとほかなき頼もし人なりや。中将、いひわづらひて歸りにければ、「いと情けなく、うもれてもおはしますかな。あたら御かたちを」などそしりて、皆ひと所に寝ぬ。夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に、尼君、しはぶきおほくれて起きにたり。ほかげに、頭つきはいと白きに、黒き物をかづきて、この君の臥し給へるをあやしがりて、いたちとかいふなるものがさるわざする、額に手をあてて、「あやし。これは誰ぞ」と、執念げなる声に見おこせたる、さらにただ今食ひてむとするとぞ覚ゆ

る。鬼の取りもて来けむほどは、もの覚えざりければ、なか／＼心やすし。いかさまにせむ、と覚ゆるむつかしさに、いみじきさまにて生き返り、人になりて、またありしいろ／＼の憂き事を思ひ乱れ、むつかしとも恐ろしとも物と思ふよ。死なましかば、これよりも恐ろしげなるものの中にこそはあらましか、と思ひやらる。

(手習巻 一七四頁)

大きな躰をたてながら寝て、突然起き上がり、奇妙な言動をする老尼君達のそばに浮舟は寝ることもできずにいる。浮舟が出てこなかったため、そもそもここに逃げ込む要因であった。中将は帰ってしまったものの、逃げ込んだ場所で浮舟は、「今宵、この人々にや食はれなむ、と思ふ」や「さらにただ今食ひてむとするとぞ覚ゆる」とあるように、食べられてしまつのではないかと命の危険までも感じているのである。浮舟は老尼君達をこの世のものと思えないような恐ろしい魔物と感じており、この魔物がいる夜の終わりを告げるのが鶏の声である。更に浮舟は鶏の声が母親の声であつたらと思つ。浮舟にとって鶏の声は命の危険を感じ、恐怖の夜からの解放、そして母親を思い出させる役割を担っていると考えられる。

以上のことから、大君と浮舟には対照的な構造がみえてくる。男性から迫られた夜が明けた際に聞こえるという点では二つは共通している。また、二人の境遇は親を抛り所にできない不安定な状態にある。一方、相違点としてまず、浮舟にとつて待ち焦がれた夜明けは、男性からの恐怖に加え老尼君達という魔物からの解放であった。浮舟自身にとつては命の危険も感じるほどであり、鶏の声はより待ち遠しいものであったのではないだろうか。また、大君は父親を、浮舟は母親を思い出す違いが見られる。鶏の声を通して、二人には対照的な描かれ方がなされているのである。

そもそも、恋人達の別れを促す役割が一般的な鶏の声に対して、恐怖からの解放を意味する例は稀な例ではないだろうか。『源氏物語』以前の作品では同じ役割の鶏の声は見つからず、『源氏物語』正編の中にも同じような例が一例だけ見られた。それは夕顔巻での夕顔死去の場面である。本文は長い夜が終わり、ようやく夜が明けて源氏が鶏の声を聞く場面である。

夜中も過ぎにけむかし、風のやゝあら／＼しう吹きたるは。まして松のひびき木ぶかく聞えて、けしきある鳥の

からこゑになきたるも、ふくるふはこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなたけどほくうとまじきに、人声はせず。などで、かくはかなき宿りはとりつるぞ、と、くやしさもやらむかたなし。右近はものもおぼえず、君につと添ひ奉りて、わなゝき死ぬべし。またこれれもいかならむと、心そらにて捕らへ給へり。われひとりさかしき人にて、おほしやるかたぞなきや。灯はほのかにまたゝきて、母屋のきはに立てたる屏風のかみ、こゝかしこのくまぐましくおぼえ給ふに、ものの足音ひし／＼と踏み鳴らしつゝ、うしろより寄りくるこゝちす。「惟光とく参らなむ」とおぼす。ありが定めぬ者にて、こゝかしこ尋ねける程に、夜のあくるほどの久しさは、ちよを過ぐさむこゝちし給ふ。

からうじて鳥の声はるかに聞ゆるに、「命をかけて、何の契りにかゝる目を見るらむ。わが心ながら、かゝるすぢにおほけなくあるまじき心の報いに、かく来しかた行く先のためしとなりぬべきことはあるなめり。しのぶとも、世にあること隠れなくて、内に聞こし召さむをはじめて、人の思ひ言はむこと、よからぬわらはへの口す

さびになるべきなめり。あり／＼て、をこがましき名を
とるべきかな」と、おぼしめぐらす。

(夕顔巻 一三〇頁)

傍線部「かろうじて鳥の声はるかに聞ゆるに」は、手習巻の「からうじて、とりの鳴くを聞きて、いとうれし。」と共通性を持ち、この場面では光源氏も浮舟と同じように命の危機を感じる夜を過ごし、朝を告げる鶏の声はとても待ち遠しかっただろう。

また、この場面は『伊勢物語』二十二段がふまえられているが、『伊勢物語』での使い方はやはり恋人達の別れを示す鶏の声である。そこから、生死に関わる恐怖の解放を意味する音に変容させたのは、『源氏物語』の独自性といってもいいのではないだろうか。

以上、浮舟の聞いた鶏の声について注目した。浮舟にとつて鶏の声とは恐怖からの救済や解放を意味していると考えた。救済や解放の音となると、総角巻に描かれた大君の鐘の音も同じだが、浮舟の恐怖は命の危険を感じる程の、より待ち遠しい音であったと考えられる。大君と浮舟には親を頼れないという状況など共通点が多いが、聞く音の重要性、そして思

い出す父親と母親の違いが対立した構造で描かれている。

命の危険を感じる状況で解放を意味する鶏の声は夕顔巻でも描かれていた。源氏と浮舟は生死を問われる状況で、同じように鶏の声を待ち続けた。二人にとって鶏の声とは命にかわる重要な音であったと考えられる。しかし、このように鶏の声がここまで重要な音として使われているのは『源氏物語』にしか用例がない。この鶏の声の活用方法は『源氏物語』の独自性であると考えられる。

三、東国の音

最後に浮舟の聞いた東国に関する音に注目したい。浮舟は継父が常陸介であったため、幼少期は東国で過ごし、二十歳の頃に京へ戻ってきた。東屋巻と手習巻で、浮舟は東国に関する音や声を聞いている。自分の故郷に関わる音を聞き、それぞれの場面で何を考えているのか、また音の役割について取り上げたい。

本文 は二条院から三条の小家へ移された浮舟が寂しく日々を過ごす場面である。

たびの宿りはつれづれにて、庭の草もいぶせき心地するに、いやしきあづま声したる者どもばかりのみ出で入り、なぐさめに見るべき前裁の花もなし。うちあばれて、はれぐしからで明かし暮らすに、宮の上の御有様思ひいづるに、若い心地に恋しかりけり。あやにくだち給へりし人の御気配もさすがに思ひいでられて、なにごとにかありけむ、いと多くあはれげに宣ひしかな。名残をかしかりし御移り香も、まだ残りたる心地して、恐ろしかりしも思ひいでらる。

(東屋巻 一七五頁)

二条院から移された東屋は、前裁に花も無く、荒れ果てた状態である。そんな場所で「いやしきあづま声」である東国の訛り声が聞こえてくる。浮舟は寂れた場所とは反対の華やかな二条院や、中君、突然迫られた匂宮を思い出す。また匂宮についてはその移り香まで残っている心地がするとその恐怖を思い出している。

次にあげる は横川の僧都に助けられた浮舟が小野の里で過す場面である。

昔の山里よりは、水の音もなごやかに。作りざま、ゆゑある所の木立おもしろく、前裁などもをかしくゆゑを

つくしたり。秋になりゆけば、空のけしきもあはれなり。門田の稲刈るとて、所につけたる物まねびつつ、若き女どもは歌うたひ、興じあへり。引板ひき鳴らす音もをかしく、見し東路の事なども思ひ出でられて。

(手習巻 一五三頁)

入水未遂をし、横川の僧都に助けられた浮舟は小野の里に移される。小野の里で浮舟は、若い女達の稲刈りの歌声や引板の音を聞き、故郷の東国を思い出している。このとを比較してみると、浮舟は東国に関わる音を聞いている点では同じだが、思い出す対象がそれぞれ異なっている。

の東屋巻では、三条の小家の侘しい様子もあつたためか、華やかな二条院や中君、匂宮を思い出している。浮舟は実父から認められていないが、中君と同じく八の宮の娘である。場合によっては、二条院のような邸に暮らしていてもおかしくない身の上となる。自分が住んでいたかもしれない華やかな二条院を知ったことで、三条の小家の様子はより受け入れがたく、庭の草にも「いぶせき心地」と感じてしまったのではないだろうか。さらにここで継父の家来たちが話す東国の訛り声が聞こえてくる。浮舟はこの声を「いやしきあづま声」

として捉えている。二条院では決して聞くことのなかったものであり、都の人には分からない訛りである。東国で育った浮舟にはおそらく話の内容が理解できたであろう。二条院に代表される都の華々しさの中では育ち得なかった自身の生まれを、「いやしきあつま声」によって実感させられたのではないかと考えられる。

一方で、手習巻では都から離れた故郷の東国を思い出している。さらに、浮舟は同じ東国の音を聞いても、「引板ひき鳴らす音もをかしく」とあるように東国に関する音に趣があると感じている。井野氏は引板の音には東国性、また記憶を呼び覚ます機能があると論じている。¹⁷⁾

手習巻は夕霧巻にはなかった新たな意味をも生み出している。傍線部に「見し東国路のことなども思ひ出でられて」とあるように、浮舟は「引板」の音を聞いて、かつて過こした「東国路」を懐かしく思い出す。夕霧巻の「引板」はあくまでも小野の風物であったが、手習巻ではそれだけでなく、東国の風物へと連想を繋げていく。第二節「歌ことば」「引板」の表現史¹⁸⁾で述べたように、「引板」に東国のイメージを吹き込んだのは『伊勢物語』

一〇段であった。東国のイメージを背負った「引板」を、聞き慣れた懐かしい音として「をかし」と聞いてしまうこと自体が、浮舟の東国性をあらわにする。浮舟が思い出した「東国路」とは「常陸」のことである。浮舟は「ひた」という名称の響きから、同じ響きを持つ「ひたち」を連想したのかもしれない。そして、「常陸」と言えば浮舟の母の名でもある。「ひた」は「ひたち」と同様、浮舟を育んだ東国を印象付ける語彙と言えよう。(中略)そして、手習巻が新たに取り入れたのは「古今六帖」の「記憶の呼び覚まし」の趣向である。手習巻の傍線部の「引板ひき鳴らすもをかし。見し東国路のことなども思ひ出でられて」の部分は、『古今六帖』の「引板の音が人を驚かして、忘れていたことをはつと気つかせる」という趣向を背後に揺曳させて、引板の音に過去の記憶を呼び覚まされる浮舟像を形作っているのだ。『古今六帖』の、何かを忘れている人を驚かす引板の音は、浮舟の心に強く激しく揺さぶりをかけ、過去を「ひたぶるに」「忘れ」ている浮舟を「ひたぶるに」「驚かし」、かつて住んでいた「ひたち」を思い出させるわけだ。

(二八七—二八八頁)

引板の音を聞き慣れた音として感じるのは、浮舟が東国で育つたからこそである」と論じている。引板の音は『伊勢物語』一〇段において東国のイメージをもって描かれ、その引板は浮舟の東国性を象徴させる音であると考えられる。加えて、引板の音は記憶を呼び覚ます音としての役割があると指摘されている。一や二で論じた鐘や鶏の声にも、誰かを連想させる役割はあつた。しかし、浮舟が何かの音を聞くことで、記憶を呼び起こしているのはこの一例のみである。また、この引板の音を聞いてから浮舟は自分の母親や乳母のことなどを思い出していく。引板の音は、唯一浮舟の故郷の記憶と結びつける重要な音であり、入水未遂後、記憶を思い出す初めの音として描かれている。

東屋巻で「あづま声」を「いやしき」と感じていた浮舟は、手習巻で東国性を象徴する音に趣を感じている。これは浮舟にとって大きな変化である。引板の音だけではなく、東屋巻に描かれているあづま声と比較することで、浮舟の東国の音に対する感じ方の変化を読み取ることができる。ではなぜ、このような感じ方の変化が起きたのか。浮舟が手習巻で聞いて

ている他の音にも注目してみたい。

本文で、浮舟は引板の音とは違う音も聞いている。それは水の音である。浮舟は手習巻までに水の音を何回か聞いているが、音の印象はまるで違う。本文は、勾宮との関係に悩み、浮舟が入水を考えるようになる場面である。

「なほわが身を失いてばや。ついに聞きにくき事は出で
きなむ」と思ひ続けるに、この水の音の恐しげに響きて
行くを、「かゝらぬ流れもありかし。世に似ず荒ましき
所に、年月を過ぐし給ふを、あはれと思しぬべきわざに
なむ」など、母君したり顔に言ひゐたり。

(浮舟巻 六一頁)

また、横川の僧都に助けられた浮舟が意識を取り戻し、入水時を回想する場面である。

いとみじと物を思ひ嘆きて、みな人の寝たりしに、妻
戸を放ちて出でたりしに、風は激しう、川波も荒う聞こ
えしを、一人もの恐ろしかりしかば、来し方ゆく先も覚
えて、簀子の端に足をさしおろしながら、行くべき方も
惑はれて、帰り入らむも中空にて、心強く、この世に失
せなむと思ひ立ちしを、をこがまして人に見つけられ

むよりは、鬼も何も食ひうしなひてよ、と言ひつゝ、つ
くく〜とあたりしを、いと清けなる男の寄り来て、『い
ざ給へ。おのがもとへ』と言ひて抱くこゝちのせしを、
宮と聞こえし人のし給ふと覚えし程より、こゝちまどひ
にけるなめり。
(手習巻 一五〇頁)

本文 からは入水前の浮舟は水の音を恐ろしく、激しい
音として捉えていることがわかる。「はじめに」で述べたよ
うに宇治十帖での水の音、風の音は用例が多い。そして、音
の変化は浮舟の心情の変化に対応していると先行研究で論じ
られてきた。¹⁸⁾ 水の音が「なごやかなり」と穏やかな音に
変化したのも、宇治から小野へと場所が変化したからではな
く、浮舟の心情が変化したからこそ、違つて聞こえてきたと
考えられる。浮舟は入水前まで匂宮と薫の間で悩み、極限ま
で追い詰められていた。それが入水未遂から横川の僧都によ
り助けられ、自分のいた場所から離れ、人間関係の苦悩から
も解放された。それにより心が落ちつき、その変化のあらわ
れが水の音の変化として描かれていると考えられる。

これは東国の音への心情の変化でも同じことが言えるので
はないか。東屋巻での浮舟は故郷の東国にも、母親の元へ戻

ることも可能だった。しかし、浮舟は匂宮と密通、入水未遂
をして東国どころか母親の元にも戻ることができなくなる。
手習巻での浮舟は、帰る故郷も戻る居場所もない状況になる。
故郷へ帰ることすらできない状況になった結果、引板の音を
きっかけに東国を思い出し、浮舟は東国を恋しく思うように
心情が変化したのではないだろうか。都の中で東国の訛り声
を理解できてしまう悲しさを感じていた浮舟は、入水未遂後
には東国に関する引板の音に趣を感じるように変化したと考
えられる。

宇治十帖において水の音や風の音に浮舟の心情の変化を読
み取る先行研究は既にある。しかしながら、浮舟の育った東
国の音を比較することでも心情の変化を読み取ることができ
ると考えられる。

おわりに

本論では、浮舟の聞いた音の中で鐘の音、鶏の声、東国の
音について見てきた。

鐘の音は宇治十帖の中で七例存在し、登場人物達の心情に

よつて、亡き人を思い出させる音や、救済を意味する音に変化している。浮舟が聞いた「かね」の音は、宇治十帖の中でも一例しかない、誦経時の鉦の音であつた。浮舟はその鉦の音を、入水の覚悟を決める、死の世界へ誘う音として聞いたのではないだろうか。浮舟にとつての鉦の音は、他の登場人物達とは違つ、生死に関わる重要な役割を持つ音として描かれていたと考えられる。

また、鶏の声は浮舟には恐怖の夜からの解放を意味し、そして母親を思い出す音として描かれている。夜からの解放という点では、大君の聞く鐘の音と同じである。しかし、浮舟は鉦の音と同様に、鶏の声を命に関わる重要な音として捉えている。また、正編に登場する源氏も物の怪に襲われる夜が明けた時に、同じく鶏の声を聞いている共通点が見られた。恋人との朝の別れに使われるのが一般的な鶏の音が、生死に関わる重要な音として描かれているのは、『源氏物語』以前の物語では用例がない。この鶏の声の描き方は『源氏物語』の独自のものであると考えられる。

最後に注目した東国に関する音では、浮舟による聞き方の変化が見られた。東屋巻で自分の育つた東国の訛り声を理解

できてしまふ悲しさを感じ、華やかな二条院を思い出していた。しかし、入水未遂後には東国を思い出させる引板の音に対して趣を感じるようになっていた。これは自分を取り巻く環境が変化し、故郷に対する感情が変化したからではないだろうか。恐ろしいと感じていた水の音が心情によつて聞こえ方に変化が現れたように、東国の音にも同じ変化があらわれたのだから。

宇治十帖では水や風の音に注目されることが多く、この三種類の音に焦点を当てる先行研究は極めて少ない。しかし、本論で注目した三種類の音も、何気ない音でありながら、聞く主体や場面によつて様々な表情を見せてきた。同じ音でも、聞く主体が違えば音は違つて聞こえ、主体の心情と密接な関係があると考えられる。

本稿に引用した『源氏物語』本文は、いずれも玉上琢彌訳注『源氏物語』（角川ソフィア文庫）による。

注

- (1) 石田穰二『源氏物語』における聴覚的印象」(『国語と国文学』二六巻 一九四九年十二月)、鬼束隆昭『浮舟と水鳥と 宇治十帖ノート』(『平安文学研究』二号 一九六八年十二月)、吉田裕美『源氏物語』宇治十帖における音の心象」(『日本文学ノート』三二号 一九九七年一月)、大胡太郎「音を書く・声を書く 『源氏物語』の音・声 体験」(『国文学 解釈と教材の研究』四八号 二〇〇三年一月)、広瀬唯二「夕顔の巻の物の怪をめぐって 物の怪と鳥の声」(『武庫川国文』六十一号 二〇〇三年三月)、前田速夫「川荒ましき瀬音 『源氏物語』宇治十帖」(『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇七年十二月)、喜屋武翔太「宇治十帖大君考察 音 声 をキーワードとして」(『学習院大学国語国文学会誌』五十四号 二〇一一年三月)など。なお本稿に直接関わる先行研究は以下の注で示した。
- (2) 相澤雅子「源氏物語」宇治十帖における聴覚表現 「鐘の音」を中心に」(『共立女子大学大学院文芸学研究所研究誌』30 二〇〇二年二月)
- (3) 三田村雅子『源氏物語 感覚の論理』(有精堂出版 一九九六年)
- (4) 新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館 一九九七年)当該本文頭注。
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 四一 宿木(前半)』(至文堂 二〇〇五年)当該本文鑑賞欄。
- (7) 阿部好臣「源氏物語」に響く「鐘」の音」(『語文』一三一号 二〇〇八年六月)では鐘の音を八の宮からのメッセージとして捉えているが、八の宮と繋がる鐘は釣り鐘である。このことから、この論文では浮舟が聞いた鐘を釣り鐘として解釈していることが分かる。また、底本では「かね」と平仮名であるが、現代注釈書では「鐘」の字があてられているのが一般的である。そのため、の浮舟の和歌について、新潮日本古典文学集成²⁾を除く現代注釈書は誦経時の鉦ではなく、釣り鐘の音として解釈がされている。
- (8) 前掲注(7)阿部氏の論に同じ。
- (9) 新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館 一九九八年)当該本文の頭注鑑賞欄。
- (10) 馬場婦久子「源氏物語の和歌表現 その位置、「秋風」「鐘の声」を中心に」(『女子大文学』国文編「三一号 一九八〇年三月」において、「つくく」と「鉦」を使った表現は、「和泉式部集」にもあり、悲哀の極限を表す言葉と考えられている。
- (11) 安道百合子「鐘の音」に「音を添へるとき」(『古代中国文学』二三号 二〇〇七年三月)
- (12) 上野英子「源氏物語」における「鶏鳴」の意味 古代鶏鳴観の継承とその文化的深化」(『実践国文学』二三号 一九八三年三月)上野氏は「鶏が鳴く」という表現は万葉集に用例があり、「東」、「東国」の枕詞になっていると指摘し

ている。しかし、本論の鶏鳴の用例と「東国」とは特に関係はないものとする。

(13) 注(3)に同じ。

(14) 注(13)と同じような指摘は、玉上琢彌『源氏物語評釈』十卷(角川書店 一九六七年)に「晨朝の鐘が聞こえて来る。山の阿闍梨の寺の鐘であろうか。姫は朝の光を恥じ、鐘の声に阿闍梨を思う。阿闍梨が知ったら何と言おう。」という注がある。

(15) 吉海直人『源氏物語』「後朝の別れ」を読む 音と香りにみちびかれて(笠間書院 二〇一六年)。また、小町谷照彦氏の「風景の解読」『総角』巻の表現構造「『文學』五〇号 一九八二年八月)でも、総角巻では夜明けの鶏の声は後朝の歌において典型的な歌材であったため、使用することで疑似後朝の歌にしたと指摘している。

(16) 例えば新編日本古典文学全集では、当該本文の頭注に、「山鳥のほろほると鳴く声聞けば父かこそ思ふ母かこそ思ふ」(玉葉集・釈教・行基)。この歌により、母(中将の君)を連想する」と指摘する。

(17) 井野葉子『源氏物語 宇治の言の葉』(森話社 二〇一一年)

(18) 玉上琢彌『源氏物語評釈』十二卷(角川書店 一九六八年)では、本文で描かれる水の音をこれまでのものと比較し、「憂し」という語にかよつあの「宇治」の山里では、恐ろしいばかりの川波の音に寝覚めがちであったが、今の住まいは

とてもなごやかな気持でいられるのである。「水の音」という語で小野の里全体を言っている。川の高さを除けば、宇治も小野も似たような風景であったはずだが、この人(浮舟)をめぐる条件がまったくちがってしまったので、風景もちがったように思われてくる。外界の事物の美は人間の心の反映であるというあの感情移入の原理なのだする。」とまた、馬場婦久子「『宇治十帖』の自然と構想」(『中古文学』二六号 一九八〇年十月)も「自殺を決意した時の切迫した心情に比べると、ずっと穏やかである。その心の変化が、宇治川の音に対する、小野の「水の音」で象徴されているといつてもよい。」とあり、本文の水の音は浮舟の心情の変化をあらわしている」と指摘している。